

自然農法水稲栽培の 中山間地モデルを目指して

このコーナーでは、全国の自然農法に取り組む農家にスポットを当て、それぞれの自然農法について語っていただきます。

今回は、愛媛県西予市宇和町で自然農法の水稲を栽培している中野農園の中野聡さんを紹介します。

中野農園がある愛媛県西予市は愛媛県の南西部に位置し、東は高知県境の山々と接して冬季には2m以上積雪する高原から、西は宇和海に面する温暖な海岸部まで、その標高差は1400mあまりもあります。そのため、市内各地で多様な気候となっています。中野農園のある宇和町は西予市中心部の宇和盆地にあり、霧の多い地域です。西予市では柑橘類や米、栗などが主に栽培され、沿岸地域ではハマチ、ヒラメ、真珠養殖、チリメンなども、山間地域では畜産（乳牛）が営まれるなど、第一次産業が中心の町です。

◆ 自然農法を志したきっかけと就農のきっかけを教えてください。

私自身、もともと現代社会に内在する食や環境、健康、農村の荒廃など様々な問題を解決するために農業が最も重要であると考えていました。私の両親が農村出身で畑仕事が好きだったことや帰省の際に遊んだ里山が影響しているのかもしれないですね。

自然農法のきっかけは1998年、学生時代に読んだ「地球を救う大変革」（比嘉照夫著）です。すぐく感動して、EMを活用した自然農法の普及に携わりたいという思いから（財）自然農法国際研究開発センター（当時）に勤務しました。在職

中は自然農法や有機農業に適した品種の育成や機関誌の作成、ホームページ管理など自然農法の普及・研究に関する業務に携わりました。

業務の傍ら、一人の農業者として自然農法を実践しながらその普及に貢献したいとの思いがだんだん強くなり、2007年春、両親の郷里である愛媛県西予市宇和町で就農して現在に至っています。

自然農法を始めてから今日までの経緯と就農前と就農後のギャップなどがありましたら聞かせてください。

自然農法を始めて2年後に有機JAS認定を取得しました。田んぼは最初2・3ha（内自然農法0・98ha）から始まり、徐々に増えて現在

普及部技術普及課



中山間地で5.5haの田んぼを切り盛りする中野農園の中野聡さん



米ぬかの還元



のどかな田園風景が広がる中野農園



E M の散布準備



深水代かき



代かき後の E M の流し込み



強固な畦を作る畦塗り機



E M 活性装置のヒーターを使い、種籾の温湯処理を行う

は有機 J A S 圃場 2・68 ha、減農薬栽培圃場が 3・1 ha となっています。ギャップで一番大きいのは想定していた生産量に達していないことでしょうか。就農前には自然農法で 5 ha の経営を目標にしていました。3 年目には目標面積に届いたんです。

が、全く手が回らない。知識として知っていることと、実際の作業で生じるズレを調整することができずに作業が後手に回ったり、思い込みが強くて失敗することが多いようで、家内からおしかりを受けます。あとは草刈りに要する労力で、中山間地の畦の面積、角度は想像を超えてかなりハードです。

自然農法の水稻栽培について こだわりなどをお聞きしたいのですが、まずは、育土（土づくり）についてお聞かせ下さい。

「生きている土」というのでしょうか。有機物やミミズ、微生物など

の生き物を全部ひっくるめて土というイメージが土台です。土が育つ環境づくりのために稲わらや堆肥などの有機物を圃場に戻すことや、E M を散布することで有用微生物の密度を上げることを基本にしながら、土壌分析の結果から各種成分のバランスを整える事にも努めています。は種や植え付け前までに育土が進むように、早めに準備を行うことが大切だということを、毎年のように実感しています。

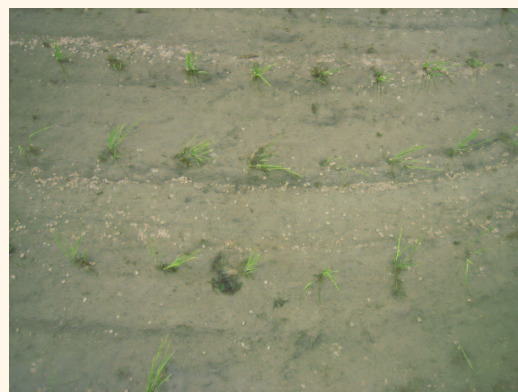
収穫の遅い田んぼや天候によってできないところもありますが、秋処理として鶏糞や米ぬかをワラと一緒に鍬込みます（150 kg/10 a）。



露地プール育苗と液肥散布



田植えの様子



田植えと同時にまいたボカシ

栽培している品種や育苗方法についてお聞かせ下さい。

また、イネの生育を順調にするためにも基礎的な田んぼづくりはやはり重要ですね。深水管理のできる強固な畦づくりと田面の均平化に努めています。

植え付け前の代かきは深水代かきで行い、その後、田面の生物相の活性を促すイメージでEMの流し込みを行っています。

これまでコシヒカリを主力品種にして、マツリバレやヒノヒカリ、ニコマル、松山三井、糯米ではクレナイモチなどを栽培してきました。これは除草などの作業を分散させるためですが、将来的には絞り込むかもしれないですね。種籾は購入が主で、塩水選せず、温湯処理（60℃で10分）後にそのまま芽だしをしています。1箱当たりの種籾はだいたい80〜105g（乾籾換算）です。

育苗は主にプール育苗で、折衷苗代も一部行っています。床土や液肥など試行錯誤を繰り返しながらも、

苗質は向上していると実感しています。

田植えとその後の生育、病害虫・雑草の対策についてお聞かせ下さい。

いま管理している田んぼの面積は約5・5haですが、田んぼの枚数は32枚と数が多いため、4〜5回の時期に分けて田植えを行っています。荒代へ植え代へ田植えへ機械除草が一連の流れですから、適期に行えるように品種を選んで栽培しています。が、今年のように空梅雨で水がないと予定どおりの作業ができなくなります。未だに試行錯誤の段階です。段階取り8分なんです。・・・。

病害虫・雑草については、あたりまえに存在することを前提に、発生しにくい環境づくり（育土・畦草管理など）を優先して、発生した場合でも作物がそれに耐えられるよう、健苗の育成に努めています。

特に雑草に関しては、秋処理を含めた育土と健苗育成、適期の田植えなどでイネが健全に生育すれば、雑草がおとなしくなると考えています。が、まだまだ育土の最中といったところでしょうか。十分に抑えきれないのが現状です。

活着した苗のお弁当的目的と雑草におとなしくしてもらうための土層づくりを目的にして、田植え直後にボカシを田面に施用し、後は草の発生具合によって揺動除草機等の物理的な対策、手取り等で対応しています。

適期に秋処理をしてワラの分解が進んでいること、活着のよい苗、タイミングよく除草に入ることがポイントだと思っています。

栽培や販売上の課題、苦勞などがありましたら教えてください。

ここは大消費地から離れているため、生産者と消費者の距離を縮める



ことが販売の課題と考えています。主な販路は産直（個人販売）で、ホームページやブログ、DM等で消費者に情報を伝えるよう努力しています。また有機農産物を扱う生協や地元産直市場など複数の販路を確保して、状況に応じて出荷ができる体制づくりを行っています。が、育土がまだ不十分で、草に負けて収量が上がり、現在は需要に恵まれていないのが現状です。反省……

地域や消費者との関わりなど農業を取り巻く情勢について、お聞かせください。

地元の青年農業者グループに所属して、地域の祭りや食育に関する行事に参加しています。この活動を通じて有機農業や自然農法に関心のある仲間を募って生産者グループを立ち上げたいと思っています。また、現在は消費者（顧客）と直接接する機会はないですが、収穫祭を実施するなどのイベントを企画したいと考えています。

自然農法を始めて良かった事、自然農法の魅力を教えて下さい。

自然農法に限らずでしょうけど、

やはりお米を食べていただいたお客さんからの声が一番の励みになります。日本全国にいろいろなお米がある中で、毎年ウチのお米を購入していただいているお客さんがおられて、ほんとうに感謝しています。半人前の私が自然農法の魅力を語るのには難しいですが、「いのち」をすぐく身近に感じられることでしょうか。イネはもちろん、ヒエなど野草の生命力はハンパないです。

最後に将来の目標・抱負をお願いします。

まずは一人でも多くの生活者（生産者、消費者）に自然農法農産物を

安定的に供給することです。それと並行して農業に対して関心をもってもらったり、自然農法の意義などを伝えることもしていきたいですね。また、自然農法や有機農業関係者、行政関係者と連携して自然農法・有機農業の発展振興に貢献したいと考えています。



大型化、生産効率最優先で国際競争力を高めようとした日本農業は大きな岐路に立っています。農業者人口は急激に減っており、中山間地の農村・農地をどのようにしていくのか、彼は自然農法での一つのモデル作りに取り組んで

います。中山間地で平均20aにも満たない水田32枚、約5・5haを切り盛りすることは、それだけでも大変なことでした。それだけに中野聡さんの「多くの生活者に農業に対する関心を高めていただく事、自然農法の意義を伝えること」が重要になってくると思います。当センターにおいても、中山間地農業における生産の安定・向上と省力化、情報の発信に共に取り組んでいきたいと考えています。

（榎原 健太郎）



苗が活着したら揺動除草機を活用



収穫前にヒエ採りを行う事もある



いよいよ収穫